



ボタニカル・アートの天才画家 ピエール=ジョゼフ・ルドゥーテ

ボタニカル・アート(植物画)の頂点をきわめ、「花のラファエロ」「バラのレンブラント」とも称賛される天才画家ピエール=ジョゼフ・ルドゥーテ[Pierre-Joseph Redouté]は、1759年に現在のベルギー南東部リュクサンブール州の町サン・ユベール(サン・チュベール)で、三人兄弟の次男として生まれました。13才よりフランドルに画家修行の旅に出たルドゥーテは、当時、大変な評判を得ていた「花の画家」ホイスムの作品に出会い、画家として花の絵を描くという新しい世界に惹かれてゆくこととなりました。やがて23才になったルドゥーテは、舞台装置や装飾画の仕事をしていた長兄のもとで働くため、パリに移り住むことになりましたが、その仕事の合間をみては、珍しい花を求めて王立植物園に足繁く通い、花々を描くことに情熱を傾けてゆきました。その王立植物園で、後のルドゥーテにボタニカル・アーティストとしての道を開かせることになる植物学者レリティエと運命的な出会いをし、植物図譜制作の仕事に携わってゆきます。すぐにその実力を認められたルドゥーテは、レリティエの推薦によって、ルイ16世王妃マリー・アントワネットの博物蒐集室付画家となり、フランス革命をはさんで、さらにナポレオン皇妃ジョゼフィーヌからも、熱烈で惜しみない後援を受けました。特に忘れてはならないのは、バラ栽培に情熱を燃やし「近代バラの母」とも呼ばれているジョゼフィーヌが、世界中からマルメゾン宮殿に集めたバラをルドゥーテに描かせたことです。そうして誕生したのが、ルドゥーテの代表作ともいえる『バラ図譜』[Les Roses] (1817-24年)でした。その後、王立植物園付属自然史博物館の専任植物画家に任命されたルドゥーテは、ますます名声を得るようになり、王侯貴族や著名人も、ルドゥーテを招いて、公開授業や個人教授を望むようになりました。ことに上流の貴婦人達からは絶大な人気を集め、「パリ中のすべての女性が、ルドゥーテの生徒か信奉者だ」といわれた程でした。この時期には、『ユリ科植物図譜』[Les Liliacées] (1802-16年)、『美花選』[Choix des plus belles fleurs] (1827-33年)など、彼の代表作が次々と制作され、まさしく、名実ともに、「花の宮廷画家」ルドゥーテの絶頂期となってゆきました。

ちなみに、ルドゥーテは、彼の天賦の画力によって認められているだけではなく、彼が駆使した独特の点刻彫版(ステイプル・エングレーヴィング)多色刷り銅版画技法によって、従来の植物図譜版画から輪郭線を可能な限り排除し、きめ細かな色彩の濃淡によって自然な花々の美しさを表現するという、画期的な手法を確立したことも、ボタニカル・アート史上における大きな功績として、高く評価されています。

このように、81年の生涯を通じて、かたくななまでに花だけを描き続けたルドゥーテの芸術は、彼の花に対する深い愛情が反映されているからこそ、時代を超えて人々の心を魅了し続けているのです。